



真宗大谷派 本明寺通信

No.4

2007年4月1日発行



去年満開になった本明寺の桜の様子です。
印刷の都合上白黒なのが残念です。



桜を見て思う

四月です。この文章が読まれる時には桜は咲いているでしょうか。私のお寺にも桜がありました。なぜ過去形かというと、その桜は改築工事のため去年の十一月に伐採してしまい、すでに無いからです。さみしいかぎりです。その桜は父親が私と同じ歳くらいの時に植えたものだそうです。なので約四十年間、私たちを見守ってきたことになりました。私の入学式や卒業式にはその桜の前で写真を撮ったことを思い出します。また私の地域にとっても、お寺の名前は知らなくとも、街中で桜が咲くお寺とし

て知られていました。先日も葬儀社の方から「桜が無くなって残念ですね。桜が咲く頃に葬儀を行った方にとって、本当にここに残る葬儀になってたと思います」と言われました。また、桜の伐採作業を行っている時にも通りかかる人が足を止めて作業風景を眺めている姿を見て「人それぞれの思い出があった桜だったんだなあ」としみじみと思いに更けてしまいました。本当にみんなに愛された桜でした。

さて、みなさんは「桜」と聞いてどんな歌を思い出すでしょうか。

みなさんそれぞれの思い出の歌や、流行の歌を思い出したりすると思います。また、この歌を思い出した方もいるでしょう。

明日ありと

思う心の

あだ桜

夜半に嵐の

吹かぬものかは

ご存知の通り、親鸞が得度を受ける時に読まれた歌です。私はこの歌を知ってから桜の花を見る度に思い出します。親鸞が生きた時代背景もあるかも知れませんが、親鸞の仏教に対する情熱を感じてしまいます。今の私にそこまでの求道心があるのかと考えさせられます。最近いろいろな研修会に参加

しても、自分のステイタスを上げるために学んでいるように感じて仕方ありません。先日の青年研修会の講義で「まず自分が悩んでいなくてはいけない」という言葉が引っかけられました。その言葉に似たような言葉は以前にも聞いたことがありましたが、自分の問題を黙認していることに思い返されました。そんなことを思いながらも、今年はこの桜の下でお酒を飲もうか考えている私であります。

ちなみに、ただ今桜二世育成中です。伐採前に挿し木しておいたものに蕾が付いていました。またお寺を見守る桜に成長して欲しいを願う限りです。

『ネットワーク9』
 教学館フォーラム

掲載記事より)

補足

親鸞は、平安時代末期、承安三年（一一七三）、日野の里（現・京都市伏見区）に、藤原家の末流貴族であった日野有範（ひのありのり）の長男として生まれましたとされています。

親鸞が生まれた時代は源平の争乱があり、世の中は激動の時代でした。また親鸞は幼くして両親を亡くしており、幼いながらに多くの経験をし、多くのことを思い、考えていたと思われる。そして親鸞九歳の春、伯父の日野範綱（ひのりつな）にともなわれ、今も京都市東山にある青蓮院にて、当時の院主、慈円により出家得度されたと言われています。その出家得度された時のエピソードがあります。当時、得度する

には役所の許可が必要でした。しかし役所からの許可が遅れ、慈円のもとにはたどり着くときには、もう日が暮れかけていました。慈円は明日にしようと言いましたが、親鸞は歌を歌い慈円に訴えました。その歌が「明日ありとく」という歌です。「明日もきれいに咲いている思う桜も、夜に嵐が来て散ってしまうかもしれない」という歌です。おそらく波乱の幼少時代を経験してきた親鸞は、自分自身を桜と重ねて「いつ死ぬかわからない」ということを思っていたのでしよう。その歌を聞いた慈円は、親鸞をすぐに得度をさせる運びにしたそうです。

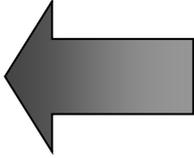


本明寺改築情報

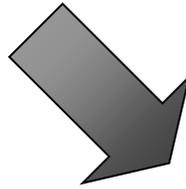
本堂・庫裡解体

(二月二十二日)

まずは本堂部分
から解体です



副住職、生まれてから二
十四年住んでたところ
がなくなるのはさみし
いですね



本明寺の解体が
終了しました

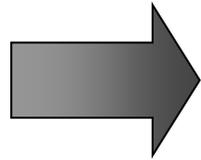
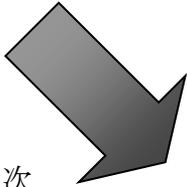


本堂部分がな
くなりました



庫裡二階部分の
解体です

次に庫裡部分
の解体です



ボーリング調査

(二月十五日)

何メートルまで杭を打てばいいか調べました。結果地下三十一メートルに砂利の層があるそうです。途中には貝殻などが出てきたそうです。本明寺は昔は海の中だったんですね。



起工式

(二月十九日)

本明寺は幾多の災害に遭いながらも、これまで存続してこれました。この度、改築という縁により、自分自身が改めて考える縁もいただいたと思います。これから多くの方々を支えられ、まずは自分自身が教えを訊く場として開いていきたいと思えます。そんなことを考えた起工式でした



山留作業

(二月二十一日)

まず、建築作業で大事な山留作業です。

山留は、基礎を作るために掘削しても、周りの土圧や地下水の水圧などによって崩れないように支持させるものをいいます。



杭打ち工事

(三月八日)

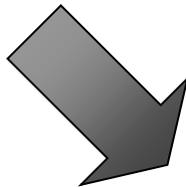
す 杭を三十三メートルの十四本打ちます



一日一本分の穴を掘り、一日一本杭を入れます。つまり、二日で一本杭を打ちます



一本分の穴を掘って出る土の量はトラック五台分です



次回もお楽しみに

改築情報は本明寺ホームページでもどうぞ!!
<http://www1.ttcn.ne.jp/~honmyouji/>

副住職の大まかな活動

「自殺」問題を考えよう

— 現実を生きる人々の声に、

耳をすます—

(平成十八年十二月十九日)

問題提起 「自殺問題に向き合う」

井上 憲司さん

(元読売新聞記者 真宗門徒)

お 話 「分かち合う力」

西田 正弘さん

(あしなが育英会虹の家課長)

／自殺対策支援センター

ライフリンク副代表)

私の歩み「遺された側の痛み」

南部 節子さん

斉藤 勇輝さん

年間3万人を超える自殺。その

悲しみの現実には私たちはきちんと向き合っているでしょうか？自殺そのものや遺族にどう接したらよいのか、よくわからないというのが正直なところ。遺族への「がんばって」「元気を出して」などの言葉も、かえって相手を傷つけてしまうことさえあります。自殺に對しての理解が、私たちには欠けているのかもしれない。

このたび教区としては初めて自殺をテーマにした研修会を開催することとなりました。大切な人を自殺で亡くされた方や自殺問題に取り組んでいる方に、ご自身の思いや歩みを語っていただきませう。その声に耳をすましながら、私たちが今なすべきことを確認していきたいと思えます。(チラシより)

昨年十二月十九日、真宗会館に

おいて、「自殺」問題を考えよう」と題し、同朋社会推進ネットワークの課題研修会が公開学習会の形で行われた。年間三万件を超える自殺に對して、私たちが今なすべきことはなんなのか。

「自殺は弱い人間がするものである」と社会的に見られることがあるが、そうではない。「自殺は強制された死である」と、西田さんは言っている。それは、個人でどうにかできる問題で自殺をするのではなく、社会全体が自殺に追い込んでいるのだと。自殺をせざるをえない社会ができてくるのだという。私たちは、社会の変化、社会の新しい流れに「耳をすまして」社会を見なくてはいけない。昨日の変化のままではなく、今日の変

化に気が付けるようにならなくてはいけないという。

また、社会的に自殺に対する偏見がある。それは、自殺に対して第三者的視点の偏見と、その社会的偏見から生まれる遺族自身の自殺に対する偏見である。本当は遺族自身は自責の念を抱え、誰かにその悲しみ、苦しみをわかって欲しいと思っっているのだが、それを押さえつけなくてはいけない、そういう環境がある。遺族は周りの人には言えないという思いと、この苦しみ、悲しみをわかってほしいという気持ちに板ばさみになりながら、日々の生活を送っていると、いう。「癒す」という言葉があるが、私が誰かを「癒す」のではなく、誰かによって私が「癒される」のである。同じような思いを持つ人同

士が思いを打ち明けること、思いを分かち合うことによつて、私が「癒される」ということがある。それが「分かち合う力」である。私たちの大半は遺族にとつて分かち合える対象ではないかも知れないが、分かち合う場を作り提供することはできる。例えば寺を開放しそのような場を作ることができないのではないかと提案していただいた。

最後に、一つ一つの自殺問題、またそれだけではなく、社会全体の出来事の中で、私自身が傍観者ではなく、当事者としてどのような問題に取り込めるか、そのことを問うことの大切さを教えていただいた。

私たちは、僧侶という立場から何かの確な答えを導き出してあげ

なくてはという、上から目線で話しがちである。しかし、本当に悩みを抱えている人から求められていることは、寄り添える人、寄り添える場なのではないかと思う。
〔『ネットワーク9』
掲載記事より〕

遺族の言葉

◆自殺の偏見をなくしたい。

自殺に無関心にならないで欲しい。
(南部節子さん)

◆自殺をしない社会をつくりたい。

苦しいことを苦しいと言える環境。それを聞いてもらえる環境が自殺対策には必要。

(斉藤勇輝さん)



日から
は真宗
会館の
外のテ
ントで
炊き出
しをし
ました。
災害対
策で購

教区報恩講

(平成十九年

一月二十六日～二十八日)

真宗会館にて行われた、教区の報恩講にスタッフとして参加しました。二十六日は帰敬式(仏・法・僧の三宝に帰依し、法名をいただく式)のスタッフとして。二十七

入された大鍋を使い、おしるこを作ったほか、チャイ(インド風ミルクテイー)、甘酒、味噌おでんを提供しました。

東北連区児連研修会

(平成十九年

二月十九日～二十一日)

今回は東京教区が担当教区で、大谷大学教授で臨床心理士の佐賀枝夏文先生をお迎えして行われました。

一般的研修というと、学校みたいに机を並べて講義を受けるものだと思いましたが、佐賀枝先生の研修はみんなで円になって話したり、絵を描いたり、二人一組で体を動かしたりするものでした。

その中で感じたことは、人と人がココロもカラダ寄りそうと、人って本当にホッとするなあと思えました。

今私たちは本当に寄りそうことをしているのでしょうか。親から小言を言われて「解ってるから！」と面倒くさいからすぐに言ってしまうことがあるを思います。それって解ってないんですよね。表面的な小言の内容にイライラして、言った人の思いや、気持ちに気付けないことが多いと思います。逆も言えます。表面的な行動にイライラして小言を言ってしまったりと。たとえ相手の気持ちが一〇〇%解らなくても、相手に寄りそい一緒に考えることが大切なんだなあと思いました。

山谷にて炊き出し

(平成十九年二月二十八日)

東京教区の同朋社会推進ネットワークが企画した、山谷での炊き出しに参加しました。炊き出しでは教区報恩講でも大活躍した大鍋を使い味噌汁を作りました。私はそこで山谷という地区があることをはじめて知りました。そこでは「いしかわらつぶて舎」という団体が十二月から二月まで毎週水曜日に台東区の玉姫公園でお弁当配りをしています。そこにはお弁当をもらうために七〇〇人近い人が列を作っていました。

山谷という地区は、江戸時代から素泊まり専門宿が集まり、高度経済成長期に日雇い労働者の街と

して発展しました。しかし、不景気に伴い、生活が厳しくなり、宿にも泊まれず路上生活を余儀なくされている人がいることを知りました。なぜ路上生活になるのか。宿代は千円台〜三千円台とあります。例えば、二千円の宿に一月泊まったら六万円になります。六万もあつたら安アパートくらい借りられると思いますが、それもできません。それは住所・職業不定、保証人がいないなどの理由があるからです。路上生活者の平均寿命は六十才代です。とても過酷な生活を送っています。今回お手伝いをさせていただいた「いしかわらつぶて舎」以外にも、多くの団体が食料



を配給していることを、お弁当をもらいに来た人から知りました。その人は

○曜日 ×時 △公園

パン・スूप □団体

というような一週間のリストを持つていました。本当に一食一食が生命をつないでいることを思い、また自分自身が「食べる」ということ当たり前のようにしていたことを改めて考えさせられました。また、普段は路上生活者を見かけても見ぬふりをしていましたが、お味噌汁を手渡しして配った時に、「一人ひとり歩んできた人生があるんだなあ」とその人たちの手を見て思いました。

お知らせ

平成19年(2007)

永代経はお休みです

毎年、5月最終日曜日(今年は5月27日)に行われる、「本明寺 永代経」は改築にともないお休みさせていただきます。

皆様方にはご迷惑をおかけいたしますが、何卒よろしくお願いいたします。

毎年10月に行われる「本明寺 報恩講」は厳修いたします。ご案内いたしますのでよろしくお願いいたします。

あとがき

本明寺通信「明一みょう一」を作り出してからもうすぐ一年が経ちます。最初は何を書いたらいいのか分かりませんでした。書き始めると意外と書くことがあって、自分自身にとって寺報は大切な場になってきています(自己満足?)。また、ご意見やご感想、寺報のアイデアなど頂けたらありがたく思います。「見ましたよ」的なことでもいいですよ。とても励みになります。

発行 真宗大谷派 本明寺

副住職 本田 彰一(釋 彰一)

〒130-0012

東京都墨田区太平二-7-1

TEL 03-3623-1536

FAX 03-3623-1538

E-mail honmyouji@mx1.ttcn.ne.jp

URL

<http://www1.ttcn.ne.jp/~honmyouji/>